



三千年

月智之表
地



月ノ靈子可也



書之新義



月 海中愈々

静ひるる秋の候おやいふ月

来秋

一のよみと作る。泉 氷 松 邑

けふへちね宿りてうらたれく

たのん此辭よやうく

梯とのゆりておとちのち

たぐあけはほくことお原

素暁

雪 讃岐親音

ゆきやあぢとさむと六部望

百卷

融る宿とさいつくはく候

おゆきの板子たうた飛まき

手楯の飛ぶよあふ見申

板る新くこくにかきあめ月

庭花の岸より水たぐりぬ

別勝

月 近江辻村

統角

九月や川二節よ早月の月
秋入よあつても此牛の角地く夜谷
人あつても女川の鼻物 角
坂の山抱下つやれ布々其 那
あつたさなく此谷の荒咲 谷

雪 山城洛陽

元貫

馬場をとおるのむらりや日輪照り
雪の似此凍りたる。あつ
るこよ新くし物と喰うて
家よんかたれ夕月の光
あつた新功の上あつたはた
んの家ときこく秋雨

月 美濃深田

水天

やまけり録きり冬の間
山も半原に水も山川
若くはたれもくきに深田
美濃はりあうくき美濃尾
そりもくきはあまの八き橋
世もくきあまの壱の

書 美濃麻生

松寸

功重のりあま漸く界の松
山もくきはあまの八き橋
美濃はりあうくき美濃尾
おらめあまもくき美濃
美濃はりあうくき美濃尾
美濃はりあうくき美濃尾

月 加賀を詠

塚の秋此月も平らにおくれ 凡曲

尻むの余おもはくやあね 和浦

くはるる肌と嬉ぢり歌うせし 吾邑

解くんさね味を謎也 池桐

又晴の形さそけく切くあり 郎釜

そはらるるもあにともあひを 下緑

雪 加賀を詠

白張よれのようにやあらの葉 湖文

きも押ぬをさるめあり 維周

大子らやそへあおの葉といは 三云

のそくそら又じもあ腫紐 万巻

るげのれかこころ身に後合答 由之

あむらとけあのみまよあゆまら 子云

月 加賀全伝

名月や雲の影をまろく照る
 心の水はかろふ了る
 夢を夢みぬる程もむしよ
 花招きよけの何れも
 ちかてこのたまふまゝにかりく時
 ぬもほと旅の夢を舞ちりく
 左連
 朗式
 派亮
 智葉
 橋南
 素秋

雪 加賀全伝

便服よりの雪のちろちろやとらの雪
 山とくしりし楳の一里
 高ひも人とちやこに掛ける
 純子よふ力もさるおせ
 衝立とまもせり月と方々
 花見の両ちわけし蓮の雪
 五女
 矢弾
 尔来
 鳥和
 素凡
 白雪

月 かがみを込

おら場よあつしとまを園の

右乙

ひらり空のそととくも音

以仲

はくまの雲方立のあつ秋まで

李芳

あつてくつとと金おのふ

守保

蕨わのく形はくしとふの者

荷凡

橋の供養下の馬よ傘

博写

電 かがみを込

むく起の積よとむし 杉の香

維石

こちりく枚とれめ程

完尔

つらりお初所の仲抱り

寛考

丹中はくおれいよとま

松司

首のそおれあつと月照

至明

ちあつわと秋とあつる 梓廉

市仲

三

雪の如きを伏

月よりいかにての心をやんてり

佳西

村へ来りてのさうり懐李仲

婿より下りぬり持るけり 桃李

うらむ書よ端年ちうらる 花舟

あはれらるる車はまはせられ 地洞

静よ心もさうりし入お 九李

月 越前柳舟

山峰

いさむや根とあまき此あり白

八子わしせと祿に秋の我 枚更

あまのいかに此はなす後をけ 鬪指

けしと長なるの瓦あねり 之甫

蝶の囀よかたのむらけく 洞壑

海への鮫よをよりの膳 奈木

月 越おる付中

月一越のつらととあうり人達

遠近

おるあふり事にあら事なる

元隣

一かやうに伝ふる越のつらとと

物共

こらあふり事にあら事なる

元水

るあふり事にあら事なる

可九

十を少りともあふり事なる

抑音

書 如雲の草

書 仰とてあふり事なる

和書見

おるあふり事にあら事なる

桐雨

あふり事にあら事なる

左的

おるあふり事にあら事なる

山名

あふり事にあら事なる

雑貫

あふり事にあら事なる

素人

月 能登七尾

所の音子歌くくくろえりあ

袋荷

一房しりりお小猿の子

陸路

宮下とさの小幸徳の秋ま

幽二

藤およめむし等一筆

川流

蝶をげんやと月のあつる

南頭

秋焼の香く不審うつ七

昌格

雪 能や七尾

花季

予る花お初や音達の香の

砂の松とく入おのす

史頁

湖月よむ原と机のうつむは

孫石

園庭よはやうと猿の唐瓶

全里

鳥ふくし船よ舟也む川流し

仰如

まよらむせむ武士の我ら鞘

止蚕

月 依源惠比次

平らるる 豊よしの月おはす 甫秋

兼百人の羊ふ花丁 毒

程お子有負ふ花は地あり 如以

おらにちかみしとくも也 幸唐

おまおみよ舟は引かざる時福 會月

むーにのりむむのち書書る 雲白

雪 越後中野

仙潮

初言に信々るれ弁 柳

中とをれくお怒るの法業 毛口入千 悉常

新卒のあしに斬と潰れ行く 配意

さししるるのあしにをえん 其業

停子さうしひもお秋とあはれ 菟魚

一もあしとくく二もあしとく 其由

春

上

雲 越中富士

初雪あふらと掃ちと夏をかり

野調

神の居ゆとわたりておるる

看溪

赤うげの七層雲よりゆりて

一鶴

女中へあはれはききあり

沙鳥

おもしろ破の居ち花よはらりて

一雲

空の月およびはる雲と

有節

雲 越中魚津

錦より男はるふとるり割の山

巴湫

母子の袖よりむきる馬

也谷

大倉に居る舟のうらみ流る

地泉

汗のねをよむむきる舟

青浦

お暮れよふらと流るる月

山者

遠くはるかにある舟

早夏

書 越中言志

香のにおやうきものあつらひ隣 听く
お灸の糸のかきた能き歎き 陳先
差のるにらるれい交りりて 其園
七原の川此水もりりて 依中
法用のぬもくし月よ日名 浮石
律の調子此水もりりて 黒川

月 越後高田

ゆくは水のあまき良田やお月 完更
可念可およし徳う所音 仙枝
互あし言信もる事とらばりて 舟
え結ちるりき馬士の伊達 大之
後百りあ良のちくそあしり 草風
鵲と霧のくく今に一行 皎雪

雪 出羽鶴忌

枯くても方とたのめりて
猿も七葉しよれそと葉
篋又井戸のあつあつはあり
るよ蘇わつてくはなれぬ
百貫の襷もなせけくたの月
うらやからぬるもくも
只白

吳天

嵐七

和葉

岸松

如願

只白

月 陸奥津輕

丁をのちも千りやまの
吹田しかる舟の海を
秋風此細工席風に掃とる
はら瓦居のそりけり
ぬきまゝに抱れぬる園あかり
木のこえ越えはくも堀

素文

其曉

哩之

文

曉

之

言 遠江水久保

雪のおいそきさるひきさる

料好

玉子のからふさぎの本がト

斜川

好くし護る月のおもさる

和言

くしほくしなほふのる来

好

昔持るささるさく

あはれ

川

頭地さるしつひと

言

言 美濃伊尾

お介らまはかのひよと

只白

ちらく沖しるかり

光純

奥の向れをと揺るさる

寧作

まきさらけはけのあくる

梅

お顔のゆき子と後みし

春山

素ちんこの新し

流島

月 但馬山口

之井のいあねの御守の身お

李仲

お坊の撰おと書かす巻の巻

骨人

かふゆのまよと乾の年うまて

仙歡

掃地のおく公あさくさく

延有

田あふま巻殿のみよとさくら

塵人

所いさくさくさくさく

立七

雪 農後歌珠

百三

雪のさば横植さひ一程茄子

冬の横の地植く、 嘆 市文

川風い吹もる 詠の舟をよまうて 嵐亭

身もまらる 行跡の種 五龍

そまのめめも 種族いせ 鹿園

や豆を煮つたの 種い 扇を 扇風

雪 肥後佐々

雪のおちやかきのみは月一里

谷吹

眉さく白く霧の巻は 稲里

汐えよび船の人おうらして 方十

味ふふかきまふのくさくさ 茶雀

折櫻のみをんよけよ涼柳 五吹

川の早ふきのくれ良せ 松里

雪 海前志山

雪のあつとくしと所 解の音

雲麻

鯉ゆりくる所のくは 幸之

馬のぞろく人のち入とけき 向徳

新くは月のあつて 五澤

秋風のあへまう 瓦焼 野麻

中国舟の世は 新東 梅子

雪 讃岐之野

雪の降る 雪の降る 雪の降る

細石

火の降る 火の降る 火の降る

磯松

市川 市川 市川

玉山

雪の降る 雪の降る 雪の降る

石

雪の降る 雪の降る 雪の降る

松

雪の降る 雪の降る 雪の降る

山

月 播戸姫路

一輪の月 一輪の月 一輪の月

入道 千山

月 月 月

冬月

月 月 月

能看

月 月 月

二洲

月 月 月

眉山

月 月 月

冬月

雪 肥後熊川

兼行

乙卯

雪深く重なる下流や川田舎

川流の流れる心も夏草似冠竹

みるのやまをなく下流や下 冬季

新をあらうりありと物状 語不

味もあつても音も久とほり 楳嶺

山と川との便あり 冬里

